

Title	蒙疆考古學の展望 (蒙疆專號)
Author(s)	水野, 清一
Citation	東洋史研究 (1939), 4(4-5): 365-381
Issue Date	1939-06-30
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/138800">http://dx.doi.org/10.14989/138800</a>
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

# 蒙疆考古學の展望

水野清一

## はしき

蒙疆の遺蹟調査はまづわが國の學者の手によつては  
じめられた。それは明治三十五年の六月であつた。工  
學博士伊東忠太氏は横川省三、宇都宮五郎の諸氏と  
もに居庸關を経て、察南の地に入り、宣化、張家口、  
天鎮、陽高の古建築を調査して、大同に入り、こゝで  
華嚴寺、善化寺等の古建築に遭遇し、雲岡石窟を發見  
し、應縣に至つて佛宮寺の遼の木造塔を見出し、五臺  
山に登り、北京に歸來された。その報告は『北清建築  
調査報告』(伊東忠太博士建築文獻所收)として世に知  
られてゐる。

少しおかれて、明治四十一年、鳥居龍藏博士夫妻は  
熱河から興安嶺を越え、ウデムチンに入り、石器時

代の諸遺蹟をさぐるとともに、また閃電河河畔に元の  
上都(文獻12)をおとづれた。また同年、故桑原隲藏博  
士、矢野仁一博士も熱河から蒙古に入り、上都の遺蹟  
(文獻14)をさぐられたのであつた。同じころ、フラン  
スの故シャヴァンヌ(E. Chavannes)も、その北支那調  
査の一部として蒙疆に足を入れ、一九〇七年十一月二  
十三、二十四日の二日を雲岡石窟の調査につひやされ  
たのであつた。

しかし、このちはわが國學者の手をはなれ、また  
文化方面の研究者からはなれて、主として歐米の博物  
學者の活動となつた。その最初のひとは、一九一四年  
から今日におよぶ二十餘年間を黃河流域の調査に身を  
ゆだねた天津北疆博物院のリサン師(E. Licent)であ  
る。その範圍は測地から、地質、古生物、或は動植物

氣象等の多方面にわたつたが、また風俗や考古學的遺物・遺蹟にも注意をおこたなかつた。(文獻12) として、その結果はつひに一九二四年、オールドスにおいて舊石器遺蹟を發見し、東亞における舊石器文化の最初の發見者たる榮譽をになつた。(文獻18) 蒙疆における師の足迹はひろく、新石器時代の遺蹟も諸所で發見してゐて、そのために *Les collections néolithiques du Musée Hoang ho Pai ho de T'ien-tsin* とする專著がある。

これについては、一九二一年から一九三〇年にわたつて内蒙の博物學的調査をおこなつたアメリカのチャップマン・アンドリュース氏 (Ch. Andrews) である。かれのひきゐた中亞探検隊は、自動車を驅つてゴビ高原を馳驅し、豊富な化石や動植物の資料のほかに、また新石器時代の人類の遺物をも採集した。この先史學の方面を擔當されたのネルソン氏 (N. C. Nelson) であつた。(文獻452122)

またリサン師とともに、オールドスの舊石器遺蹟を發見したタイラー・ド・シャルダン師 (Teilhard de Chardin) は、一九三〇年にはアメリカの中亞探検隊

に加り、また一九三二年にはアールト・シトロイエン (Hardt-Citroen) の自動車探検隊に参加し、シリアからトルキスタンをつききつて、蒙疆に入り、北京に出た。この間、炯眼なタイラー師は數個所で新石器時代の遺蹟(文獻23)を發見してゐる。

しかし西北方の一角では、この間にあつてもなほスタイン氏 (A. Stein) の第二回中亞探検(一九〇六—八年)があつて、敦煌千佛洞および漢の長城にまでその調査の手をのびした。(文獻6) 一九〇八年にはコズロフ氏 (P. K. Kozlov) の蒙古西藏探検隊がエチナ河畔に西夏文字で有名になつたカラホト遺蹟(文獻49)を發見した。スタイン氏の第三回中亞探検(一九一三—一六年)はさらに東して、エチナ河畔に達し、こゝでカラホトのほか、漢の長城を調査した。(文獻7)

しかるに一九二八年以降、中央亞細亞の探検家スヴェン・ヘディン氏 (Sven Hedin) は支那學者と合作探検をはじめ、つひに、その一行中のベルグマン氏 (Bergmann) によつてエチナ河畔の徹底的調査となり、漢代の木簡が多數に發見されたのみならず、なほ唐代の遺蹟さへ見出されたといふ。(文獻9) しかし、そのまへ

この合作探検隊の第一回入蒙において、百靈廟附近の  
 オロン・スム遺蹟(文獻II)の發見となつた。そしてラ  
 ティモア氏(O. Lattimore)(文獻59) マルチン氏(D.  
 Martin)(文獻60)の踏査(一九三六年)となつて、この  
 遺蹟の重要性がしだいに認められるに至つた。

昭和五・六年のころから、わが國の學者もふたゝび  
 蒙疆に足をのばすやうになり、なかんづく、東亞考古  
 學會の原田淑人、駒井和愛、江上波夫諸氏、および水  
 野等の内蒙古新石器遺蹟、綏遠青銅器(文獻1516)、元  
 上都遺蹟(文獻5657)、百靈廟附近諸遺蹟の調査(文獻16)  
 東方文化學院の關野貞博士、竹島卓一氏等の大同古建  
 築の調査(文獻4445)等は注意すべきものであらう。

支那の學者は民國十六年以來、スヴェン・ヘディン氏  
 ・との合作探検により蒙疆西部から新疆にかけて、おほ  
 いに氣をはいてゐたし、また北京の營造學社(文獻47)  
 も大同古建築の調査にのり出し、その手ぎはよい調査  
 ぶりをあらはした。かくて支那學者の學術研究もおほ  
 いに勃興するかと思はれたが、しかし、その底をわつ  
 て見れば、國民政府の排外政策につられた非協調的態  
 度に多大の暗影を藏してゐたことは疑ひをいれない。

しかし、とにかくかうした蒙疆調査によつて、どれ  
 だけのことが明らかになつたか。各時代にわけて簡單  
 に述べて見た。

#### 〔文獻〕一、通記

- (1) E. Licent; Comptes-rendus de Dix Années (1914—1923) de séjour et d'exploration dans le Bassin du Fleuve Jaune, du Pai ho et des autres tributaires du Golfe du Pei tcheu ly (Publications du Musée Hoang ho Pai ho) Tientsin 1924.
- (2) E. Licent; Comptes-rendus de Onze Années (1923—1933) de séjour et d'exploration dans le Bassin du Fleuve Jaune, du Pai ho et des autres tributaires du Golfe du Pei Tcheu ly (Publications du Musée Hoang ho Pai ho, No. 33) Tientsin 1936.
- (3) J. G. Andersson; Children of the Yellow Earth. London 1934.
- (4) R. Ch. Andrews etc; The New Conquest of Central Asia. A Narrative of the Explorations of the Central Asiatic Explorations in Mongolia and China, 1921—1930. (Natural History of Central Asia, vol. 1) New York 1932.
- (5) R. Ch. Andrews; On the Trail of Ancient Man. New York 1926. 小牧實繁氏譯「古代人類の跡」人類

學雜誌、第四二卷二號)

- (6) A. Stein, *Sindia*. Oxford 1921.
- (7) A. Stein, *Innermost Asia*. Oxford 1923.
- (8) S. Hedin, *Across the Gobi*. London 1931.
- (9) 侯仁之譯「斯文赫定黑城探險記」禹貢半月刊、第一卷九號) S. Hedin, *The Black City of the Gobi Desert* (Listener. Feb. 1934)
- (10) 徐炳昶『西遊日記』民國二十年。
- (11) 黃文弼「蒙新旅行之經過及發現」國學季刊、第二卷三號(燕京學報、第八期)(地學雜誌、第十八年三期)民國十九年。
- (12) 烏居龍藏博士『蒙古旅行』明治四十四年。
- (13) 烏居きみ子女史『土俗學上より見たる蒙古』昭和六年。
- (14) 桑原隲藏博士「東蒙古調査報告」歴史地理、第十七、第十八卷) 明治四十四年。
- (15) 江上波夫氏・水野『內蒙古長城地帶』(東方考古學叢刊乙種第一冊) 昭和十年。
- (16) 江上波夫氏等『蒙古高原横斷記』昭和十二年。
- (17) 江上波夫氏「綏遠地方旅行略記」歷史學研究、第六卷一號) 昭和十一年。

# 1

蒙疆の考古學的遺蹟は舊石器時代からはじまつてゐる。天津北疆博物院のエミール・リサン師はオルドス

で、舊石器時代人の足迹を發見した。シャラオツソングルと水洞溝との二個所である。この舊石器文化が、果していかなる系列のうちに於かれてよいかは、まだわかつてゐない。しかし、北支那に遍滿する黃土の堆積する以前に、現在に絶滅した巨體の哺乳動物とともに生息し、幼稚な、うちかきの石器を使用してゐたことだけはあきらかである。もちろん、火は知つてゐたのであつて、水邊に焚火のあとがのこつてゐる。骨骸の遺骸は齒の一二が發見されたのみである。(文獻18)別に山西保徳の化石包含層からも人類の齒らしいものが出土してゐる。また内蒙古ウドの近くのトンゴルにも、舊石器らしい遺物の發見されたもの(文獻23)があるが、まだ全體からいへば寥々たるもので、今後の調査にまつべきものがすこぶる多い。

## 〔文獻〕二、舊石器時代

- (18) M. Boule, H. Breuil, E. Licent et Teilhard de Chardin; *Le Paléolithique de la Chine* (Archives de l'Institut de Paléontologie Humaine, Mémoire 4) Paris 1928.

(これと同じ内容のものが天津北疆博物院の刊行物としても出版されてゐる)

## 2

新石器時代になると蒙疆の特殊性がやうやくはつきりしてくる。うちかいた小形の石器を主體とする蒙古の細石器文化と、磨いた大形の石器を主體とする黄河の磨石器文化とが、この長城地帯で交錯してゐるらしい。(文獻15) 前者の遺蹟はフリントの石匙とか石鏃、或は石刃や石核があり、砂岩の環石や石棒、石皿がある。土器は黒褐色で、やゝ粗質である。時に北方的な櫛目の文様があるかと思ふと、まれには南方の系統をひく鬲形土器もある。後者の遺蹟は緑石の石斧を主とし、有孔石斧があり、水成岩の石庖丁があり、砂岩の環石、石棒、石皿がある。土器はよくわからないが、赤褐色土器らしい。もちろん、彩文土器の發見される可能性は大いにある。リサン師が榆林の南方で發見した土器(文獻328)は、彩文を認めぬが、とにかくその系統のものである。遺蹟としては張家口外高家營子の遺蹟はその大きなものである。大同附近のいはゆる大王村の一群遺物(文獻29)は東京帝國大學の考古學研究室にあつて、いちじるしいものだが、その遺蹟地の所在はまだつきとめられてゐない。

内蒙古における細石器遺蹟は至つて多い。砂丘のあるところ、これみな遺蹟といつてもよいからであるが、やはり滂江街道の東に多いやうである。シリンドルの貝子廟や、バイン・ノール附近や、チャハルのドロン・ノールなどには顯著な遺蹟(文獻15 16 25 27)が發見されてゐる。西の方では外蒙の境に入つてシャバラック・ウス(文獻21 22)など重要な遺蹟であり、遺物の發見は少いが、ハミに近い七角井子(文獻23)はさらに西方にのびた點で注意される。

新石器時代遺跡のうちで、やゝちがつたものは張家口外元寶山の洞穴遺跡(文獻26)であり、また百靈廟附近の石籬(文獻16)の遺蹟である。前者は赤色磨研土器であるから、或は青銅器時代に入るかも知れぬ。墳墓としての洞穴ではあるが、住居としての疑もある。後者も時代はよくわからない。おそらく、青銅器時代に入るものであらう。そして、それは住居址であるとともに、あるものは墳墓の石かこひであり、シベリアの石柳墓、また熱河の石柳墓とよく似てゐる。

## 〔文獻〕三、新石器時代

(19) E. Licent; Les collections néolithiques du Musée

Hoang ho Pai ho de Tientsin (Publication du Musée  
Hoang ho Pai ho de Tientsin, no. 14) Tientsin 19  
32.

- (20) エ・リサン師「天津北疆博物院に代表されし北支那の  
新石器時代」(人類學雜誌、第四六卷二一四號) 昭和六  
年。

- (21) N. C. Nelson; The Dane Dwellers of the Gobi  
(Natural History, vol. XXVI, no. 3) 1926.

- (22) N. C. Nelson & Ch. P. Berkeley; Geology and Pre-  
historic Archaeology of the Gobi Desert (American  
Museum Novitates, no. 222) 1926.

- (23) Teilhard de Chardin et C. C. Young; On Some  
Neolithic and possibly Palaeolithic Finds in Mon-  
golia, Sinkiang and west China (Bulletin of Geolo-  
gical Society of China, vol. XII no. 1) Peking 1932.

- (24) G. B. Barbour; The Geology of the Kalgan Area  
(Memoires of the Geological Survey of China,  
Series A, no. 3) Peking 1932.

- (25) 小牧實繁・江上波夫・駒井和愛・水野「蒙古多倫淖爾  
に於ける新石器時代の遺蹟」(人類學雜誌、第四十卷八  
號) 昭和六年。

- (26) 小牧實繁・江上波夫・駒井和愛・水野「張家口元寶山  
の洞穴遺蹟」(人類學雜誌、第四十六卷九號) 昭和六年。

- (27) 江上波夫「石器時代の東蒙古」(考古學雜誌、第二十

二卷四・五號) 昭和七年。

- (28) 水野「天津北疆博物院をのぞく」(考古學、第七卷 昭  
和十一年。

- (29) 東京帝國大學文學部考古學研究室編『考古圖編』第五  
輯、昭和六年。

### 3

青銅器時代になると遺物は豊富であるが、その遺蹟  
は全くわかつてゐない。いはゆる綏遠青銅器で、オル  
ドス青銅器ともいはれてゐる。(文獻153031) その出土  
地は、おほむね綏遠盆地とオルドスであつて、蒙疆地  
帯一般に分布してゐる。採集される場所は砂地か何か  
であらう、青銅といへばさい鏽で、なかには黄褐色を  
呈するものが多い。

利器としては短劍と刀子であり、斧頭である。それ  
に馬具などの革金具が多い。特色のあるのは飾板の意  
匠で、動物が頻繁に使用され、ことにその動物が咬み  
あつてゐるすがたは全く古今獨歩である。さういふ點  
から、動物様式の名でよばれ、世界各地の蒐集家に珍  
藏されてゐる。そして、それは新石器時代の文化にと  
もに、西方および北方とふかい親縁を有するので注意

される。端的にいへば、この青銅器文化は南ロシアのスキタイ文化、中部ロシアのアナニノ文化、シベリアのミヌシンスク文化と一連のもので、遊牧民的な色彩がつよい。

しかし、支那文化、特に秦式青銅器文化ともふかい交渉をもつてゐる。それは地理的關係から至極當然なことであらう。たゞ、これがどういふ交渉をもつたかの詳細は、將來その遺蹟を發見し、發掘調査した結果にもとづいて、はじめて明らかになることであらう。

#### 【文獻】三、青銅器時代

- (30) J. G. Andersson ; Der Weg über die Steppen. (Bulletin of the Far Eastern Antiquities, no. 1) Stockholm 1929.
- (31) J. G. Andersson ; Hunting Magic in Animal Style. (Bulletin of the Far Eastern Antiquities, no. 4) Stockholm 1932.
- (32) M. Rostovtzeff ; Le centre de l'Asie, la Russie, la Chine et le style animal. (Skythika, I) Prague 1929.
- (33) A. Salmoney ; Sino-Siberian Art in the Collection of C. T. Loo. Paris 1933.  
(其他省略)

#### 4

支那文化との詳細な交渉はわからないにしても、綏遠青銅器時代において、やうやくこの地に入りこむ漢人の數は増加したらしい。その足迹は陰山山脈のいたるところに見出される。黠色土器で代表される住居址あるひは城址(文獻15)である。それは秦漢式の支那文化であつて、秦漢帝國の拓境史に相應する。九原、雲中、雁門、代郡、上谷等の秦郡の遺址はまだ發見されないが、いづれそのうちには見出されることであらう。殺虎口外に出土したといふ秦の方壺などは、おそらく、秦の雲中郡などの遺蹟(文獻37)からであらうと思ふ。

かうした漢人侵略の結果として、秦の長城が陰山の山嶺をはしるやうになり、漢の亭障が朔北の原野にひこむやうになり、つひに綏遠青銅器文化の衰滅を來たしたのであらう。(文獻15)

秦の長城の遺蹟はまだ調査されたことがない。漢の長城や亭障は敦煌からエチナ河畔にかけて發見され、いろいろな遺物を出土してゐるが、なかんづく、文字を記した木簡の發見は歴史研究の上に絶大の光明を授



じた。(文獻679)

蔡南懷來の火燒營子土城址(文獻15)は上谷沮陽縣の遺蹟かも知れない。また蔡南懷安の東南に發見された四基の漢代墳墓(文獻38)は、多數の漆器、銅洗、博山爐及び鏡等を出土したが、やはり上谷郡の一部であつたらうか。

聞くところによると、昨年は京城帝國大學の調査隊が蔡南蔚縣に土城と古墳群とを發見したさうであるが當地は古來、戰國の代國、秦漢の代郡に比定されてゐるから、さうした遺蹟であるかも知れない。民國二十三年にも蔚縣第三區張家莊で、漢墓が發見され、五銖、や土器多數とともに棺材まで出土したことがある。

晋北で有名なのは渾源縣李峪村の遺蹟である。こゝから出土したものは純然たる中原の秦式青銅器(文獻34・36)であつた。その量からいつても、また質からいつても、實に驚くべきもので、戰國から秦漢時代にかけてこの地方がいよいよ漢化されたあとをのこしたものとといへる。この遺蹟はおそらく當時の墳墓と推定されるが、まだ學術的な實査を経てゐないのは遺憾なことである。

とにかく、この時代になると、全く黃河中原と同様な遺物が長城地帯の各地にひろがつてゐる。明刀錢、五銖錢、王莽錢などをはじめとして、秦漢式の古銅器は各地から出るらしい。秦漢式の土器を出土して有名なのは榆林附近の油房頭の遺蹟(文獻19)である。

#### 【文獻】四、秦漢時代

- (34) 梅原末治氏『戰國式銅器の研究』(東方文化研究所研究報告、第七冊)昭和十一年。
- (35) G. Salles: Les bronzes de I-ryu. (Revue des Arts Asiatiques, tome VIII, no. 3)
- (36) 「渾源出土古器」(燕京學報、第十七冊)民國二十七年。
- (37) 羅振玉『僞盧日札』民國二十三年容氏再刊。
- (38) 張維華「懷安漢墓發掘訪問記」(禹貢、第七卷八・九期)民國二十六年。

## 5

右の秦漢式の時代を青銅器時代から鐵器時代の初期にかけたものとすれば、南北朝時代は鐵器時代の第二期といへよう。この時代は正に北方民族の活動期にあたり、諸部族が南下し、小國が各地に分據した。

鮮卑拓跋部が最初に據つた雲中の盛樂城は、漢の定襄(あるひは雲中)郡成樂縣であつた。綏遠の南にある

和林縣の附近と思はれるがまだつきとめられない。いま俗に青冢とか、王昭君墓とかつたへられてゐる綏遠南方の漢式墳丘(文獻15)は拓跋氏の雲中金陵ではないかと思ふ。匈奴出身の大夏王、赫連勃勃はオルドスの統萬城に據つて、おほいに土木の工を起したが、そのあとは榆林の附近にあるだらう。

拓跋氏は北魏を稱するやうになつて、平城に都をうつした。それは漢の雁門郡平城縣であり、てうど、いまの大同である。いまの町から北の方に土城の北壁をのこし、玉河の東に東壁のあとらしいものがあつて、『魏書』『水經注』の記載に合致する。まだ宮殿の位置をつきとめないけれども、各所に當時の土器片や瓦片を出土するから、國都の輪廓もおひひわかつてくることと思ふ。土器や瓦は大體において、漢式であるが、蓮瓣瓦當の出現とか、唐草の押型文の土器にその時代の特色がよくあらはれてゐる。(文獻39-41)

この平城時代、大同附近につくられたものとしては北方山に永固陵があり、西方雲岡に靈巖石窟寺がある。後者はあまり有名であるから、こゝには省略するが、前者は文献の記載によく一致し、文明太后の墳丘

を中心し、その東北には小さい孝文帝の壽陵すなはち萬年堂があり、前方にはいはゆる思遠寺のあととおぼしい遺構がある。(文獻41)

北魏はかうした帝都、佛寺の經營のほか、また北方蠕々族などにそなへるため、長城や鎮城を陰山のあたりにきづいた。昭和十年の江上君の調査で、それらしいものが發見されてゐる。

とにかく、北魏は蒙疆から立上つて北支那を統一したのであるから、まだ北魏の遺蹟はあちこちに發見されるであらう。また蒙疆の考古學といふ點からいへば北魏遺蹟の調査がその重要な部分を占めることであらうと思ふ。

#### 〔文獻〕五、南北朝時代

(39) 水野「大同通信」(考古學、第九卷八號) 昭和十三年。

(40) 水野「大同再信」(考古學、第九卷九號) 昭和十三年。

(41) 『考古圖編』第九輯。昭和十年。

(42) 『支那工藝圖鑑』第四輯上、瓦磚編、昭和八年。

(雲岡石窟關係は省略、木下本太郎氏『大同石窟寺』を見よ)

## 6

隋唐の帝國は全支那を統一して長安、洛陽に國都を

かまへ、この地方は邊境の州縣になつた。突厥、ウイグルもその王庭を漠北、あるひはトルキスタンに營んだから、その中心からもはづれてゐた。かういふためであらうか、この時代の遺蹟がどこにどうのこつてゐるか、どんな遺物がのこされてゐるか、全くわからぬ。たゞベルグマン氏は、エチナ河畔で、唐代の遺物遺蹟(文獻9)を發見したというてゐるのであるが、これもどんなものかまだ正式の報告が出てゐない。しかし、つぎの遼金元時代の遺蹟は多く唐代からの繼承によつたものと思はれるから、將來、遼金元の遺蹟が調査されるにつれて、唐代のものも、おひ／＼わかつてくるのではないかと思ふ。

## 7

遼金元の時代になると、また北方民族が活動をはじめ、この地方はいつもその支配下にあつた。しかし、のこされたものはすべて都城とか、佛寺で、全く支那風なものである。

大同の南にある應縣佛宮寺の木塔は明治三十五年、伊東博士が發見されてから、北支那における最古の木造建築として有名であつた。八角五層の木塔で、よく

均衡がとれてゐる。これについては最近、小野勝年君が本誌(文獻46)に紹介したから、こゝでは省略しよう。

大同の華嚴寺、善化寺も伊東博士が發見されて、大體金代のものと推定(文獻43)されたが、その後、支那建築史研究の發達した結果(文獻47)、華嚴寺薄伽經藏、海會殿、善化寺大雄寶殿、普賢閣等は遼代、華嚴寺大雄寶殿、善化寺三聖殿、山門等は金代と推定されるに至つた。なほこの時代にはこゝに西京があつたので、雲岡でも石窟の前に木造伽藍の大造營が行はれたと見え、その時代の遺構がのこつてゐる。大同河東の古城村から東北にかけてあるひとつの土城址(文獻39)はこの時代のものではないかと思ふが、西京址ではないらしい。西京はやはりいまの大同そのものでなかつたかと思ふ。

綏遠、つまりいまの厚和の東にも一基の磚塔がある。これを取りまいて、またひとつの土城がある。磚塔は金代の造建で、土城は遼以來の豐州天德軍の遺址とされてゐる。この磚塔については別項村田治郎博士の論文(文獻43)を参照されたい。

古く一九〇八年、ユズロフ氏によつて發見され、ス

タイン卿、ベルグマン氏によつて調査されたカラ・ホト(黒城)(文獻7949151)は、エチナ河の盡きるところにあり、漢代でいへば居延海の地である。西夏文字の經典とか、書物を

出土したので、西夏の遺址として有名であるが、唐代にもすでに何らかの居住地があり、元代でマルコ・ポーロのエチナはすなはちこれで、あひかはらず邊陲の重要都市であつたものと思はれる。この廢城は厚い磚築の城壁をめぐる

した長方形で、東西にかぎの手の城門があり、東部に清真寺があり、縦横に走つた市街がよくのこつてゐる。遺物としては佛畫、佛像その他のいろんな日用品

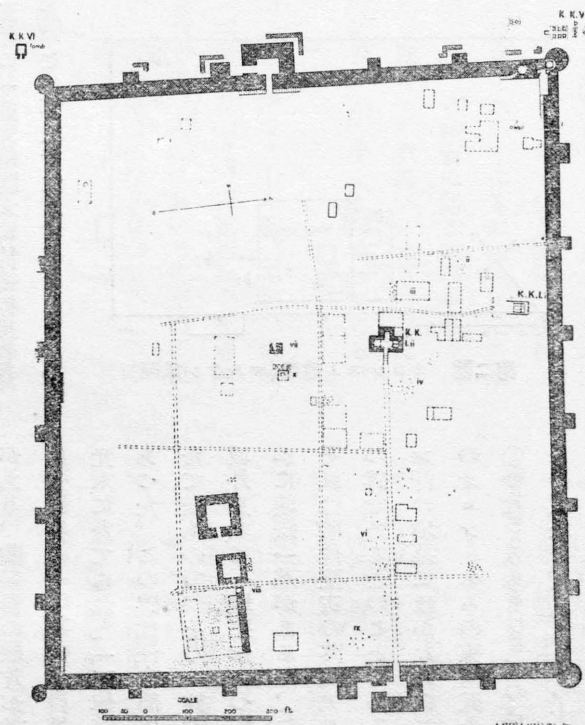
を多數出土してゐる。

元代の遺蹟として重要なのは、何といつても灤河上流の上都であり、百靈廟附近に散在する汪古部の諸遺蹟である。

蹟である。

上都址は古く故桑原隲藏博士、鳥居龍藏博士が踏査されたこともあるが、インペイ氏の調査(文獻55)はやくわしく、また昭和十二年には原田淑人博士を主班として東亞考古學會でも之を調査した。

(文獻5657) ドロン・ノールの西北九里ばかりのところ、閃電河の北畔にある。東西が約五町弱、南北五町強の磚築の内城と、約十三町四方の石築の外城とがあり、さらにこれより北部と西部に土壁の附郭がある。内城には東西南の三面にそれ／＼門が



第一圖 カラホト遺蹟(スタイン氏圖)

あり、外城には東西にそれぞれ二門、南北にそれぞれ一門づきの門がある。内城の北部に宮殿址あり、外城の東北部に華嚴寺あり、西北部に乾元寺があり、華嚴寺からは至元二十五年の「皇元敕賜大司徒筠軒長老壽公之碑」が出土した。この都城で注意すべきことは、

歴代の國都とちが

つて、内城、すな

はち宮城が外城の

中央にあることで

この點はいまの北

京城と一致してゐ

る。遺物としては

花文を施した大理

石片、緑釉の鴟尾

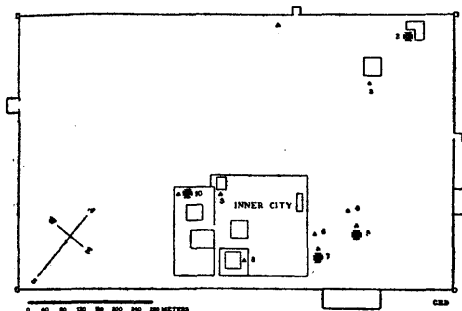
片や瓦當、白磁、

青磁の破片等を採

集した。元の汪古部ののこした諸遺蹟（文獻1159—64）

は、まづ百靈廟東北三十キロ、アイバギイン・ゴル

（Aibaghi-in-gol）の西畔にあるオロン・スム（Olonsume）の土城址である。東北から西南に長い土城



第二圖 オロンスム遺蹟（マルチン氏圖）

で、九百メートルに六百メートルある。内城は方二百メートルあまりで、中央の東南よりにあり、西南に三分一ぐらゐの附郭がある。城の内外には建築物の遺址があり、陶磁器の破片が散亂し、そのあるものからは景教徒の十字墓碑が発見されてゐる。またここには元末にたてられた「王傳德風堂碑」（一三四〇年頃）があつた。この碑は汪古部馬札罕の死後、八都帖木兒のたてたもので、その一族の名が見えてゐる。また別に城外東北に一墳墓があつて、石獅一對、石人一對のほかに龜趺一基があるが、この碑はすでに運び去られた。それは明代蒙古の英主アルタン汗の功業を記した蒙文の碑であるとのことであるから、この墳墓こそアルタン汗の墳墓にほかならぬことになる。シヤラ・ムレンのオロン・スムの東南五十キロ、ムコル・ソボルガン（Mukhor-Soborgan）の丘陵の下で、方五六百メートルの城址と、その中から十字墓碑が発見され、これよりさらに五十キロばかりの東南、シヤラ・ムレンの河畔にワンム（Wang-mu）とよばれてゐる一丘陵があり、そこからも多數の景教十字墓碑が発見された。そのうちにひとつの支那式の碑額があり「管領諸路也烈□□

荅耶律公神道之碑」と書かれてゐる。ワンムとは王墓の意であらう。なほこのシヤラ・ムレン河域では諸所にほゞ同時代の城址や十字墓碑が見出された。かくて百靈廟附近の元代汪古部遺蹟はやうやくあきらかになりつゝある。それとともに、なほ元代景教徒の遺物として、多くの人々の注意をひいてゐるのはいはゆる西蕃印(文献1565 69)である。青銅製の印章様のもので、十字とか、萬字とか、鳩などの意匠からなり、やはり綏遠を中心とした蒙疆西部から盛んに出土してゐる。

\* \* \*

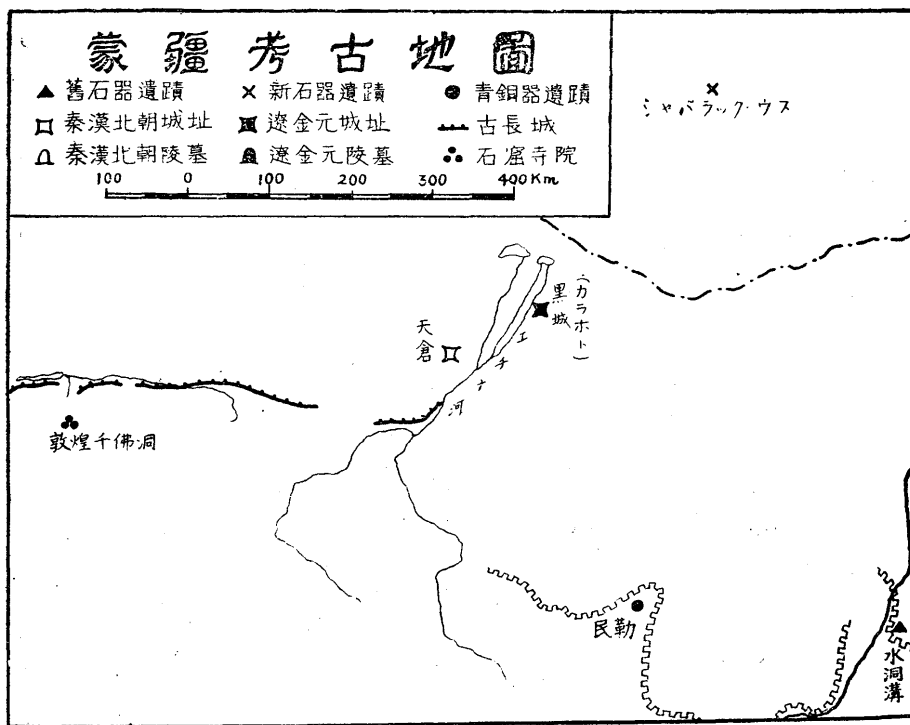
蒙疆において遺蹟とよばれるものは、一應、遼金元の遺蹟ではある。明清のものは、長城とか、燧臺のほかに、縣城でも鎮城でも、大體においてまだ現に使用され、生きてゐて、まだ遺蹟になりきつてゐないのである。

【文獻】六、遼金元時代

- (43) 伊東忠太博士『北清建築調査報告』(單行、また東洋建築の研究上所収)
- (44) 關野貞博士、竹島卓一氏『遼金時代の建築と其佛像』昭和八・九年。
- (45) 關野貞博士「大同大華嚴寺」(支那の建築と藝術所収)

- (46) 小野勝年氏「應縣のことなど」(東洋史研究、第四卷一號) 昭和十三年。
- (47) 梁思成・劉敦楨「大同古建築調査報告」(中國營造學社彙刊、第四卷三・四期) 民國二十二年。
- (48) 村田治郎博士「厚和の塔と寺」(東洋史研究、第四卷四・五號) 昭和十四年。
- (49) P. K. Kozlov; Mongolei, Amdo und die tote Stadt Khara-khoto. Die Expedition der Russischen Geographischen Gesellschaft 1907—1909, Berlin 1925.
- (50) 羅福裊「俄人黑水訪古所得記」(國立北平圖書館館刊、第四卷三號)
- (51) 向達「斯坦因黑水獲古紀略」(國立北平圖書館館刊、第四卷三號)
- (52) S. W. Bushell; Journey outside the Great Wall (Journal of the Royal Geographical Society, vol. XLIV) 1874.
- (53) A. M. Porzniev; Mongoliya i Mongoly, Tome II, 1893. 『東亞蒙古』
- (54) M. van Ierberghe; Au Pays des Centaures. Notes de voyage sur la Mongolie, Tientsin 1903.
- (55) Lawrence Impey; Shangtu Summer Capital of Kublai Khan (Geographical Review, vol. XV, Oct) 1925.
- (56) 駒井和愛氏「元上都址の調査」(考古學雜誌、第二七卷)





croix et colombes provenant de la Boucle  
du Fleuve Jaune. (Revue des Arts Asiatiques,  
vol. VII) Paris 1931.

(66) 佐伯好郎氏「支那綏遠省出土萬字十字架意匠の  
徽章に就いて」(寶雲、第六冊) 昭和八年。

〔附記〕

遺蹟圖をつくつて見たが、これははなはだ不充分  
なものである。本文中に出てこなかつた地名につ  
いて一言説明を加へると、エチナ河畔の天倉は漢  
代の城址で、木簡がたくさん出土してゐる。西北  
科學考古團の調査にかゝる。黒柳岡もまた同團の  
調査したもので、やはり漢頃の城址らしい。民勒  
はもと鎮番縣といつたところで、アンダーソン博  
士はこの城西で多數の遺蹟に遭遇した。なかんづ  
く、沙井といふところで三つの住地と、二つの墓  
地とを見出した。しかも、その住地は土壁でめぐ  
らされてゐた。遺物は赤褐色土器で、骨器、小珠  
管玉、子安貝あり、その上にスキタイ系の青銅器  
があり、甘肅六期のうちのもつともあたらしい時  
期とわかれてゐる。J. G. Andersson; Preliminary  
Report on Archaeological Research in Kansu  
(Memoir of the Geological Survey of China,  
Series A, No. 5) Peking 1925. 地圖張家口東家



營子は高家營子の誤である。

## 8

これが今日までに調査された蒙疆遺蹟の概要である。これからどうなるであらうか。またどうさるべきであらうか。

事變の進展とともに支那學者の調査は一とんぎにまはれた。歐米學者は事變前からやゝ傍觀の態であつた。わが國の學界は最近とみに大陸に伸びようとする氣運になつたが、事變とともに蒙疆遺蹟の調査も一段と活潑になつて來た。昨年は、わたくしも東方文化研究所から雲岡石窟の調査に行つたが、村田治郎博士も蒙疆古建築の調査に出かけられた。それに京都帝國大學の有志も蒙疆調査團を組織し、京城帝國大學も別に調査團をつくつて活動した。今年もまた、わたくしたちの雲岡石窟調査はつゞき、村田博士の古建築調査も續行される。それに東亞考古學會では原田淑人博士を

主班として北魏平城故都の發掘が企圖され、東方文化學院では江上波夫氏等が陣容を新にして、汪古部諸遺蹟の踏査をもくろんでゐるし、また學術振興會でも京綏沿線の史蹟調査をかんがへてゐるとかいふ。なほこのほかにもあちこちでいろんな計畫が進行してゐることであらう。

いまこの簇生するわが國の調査事業を見れば、一應盛なりともいへるが、これをいままでの歐米學者の調査にくらべると、なほ貧弱であり、腰がすわつてゐないことを痛感する。これはわたくしだけのひが目であらうか。それならばさいはひである。

しかし、もしさうでなかつたら、それはわれ／＼學徒の罪であらうか、それともまた、わが國情のしからしめるところであらうか。とにかく、いづれにしてもこれはあらためなければならぬ。そして、がつちりと腰をすゑて蒙疆遺蹟の調査に従事したいものであると考へる。